

2014年9月8日

開先付き異形棒鋼「NewJ-BAR」
-設計マニュアル改訂について-

〒106-0032
東京都港区六本木 7-17-10-321
株式会社ブレイブ
Tel 03-6438-1783
Fax 03-6438-1784

この度、『開先付き異形棒鋼 WSD490・WSD390 設計マニュアル（杭頭補強編）平成 26 年 4 月』に関して、以下の理由により一部、修正、又は削除を致しました。

- ① 誤解を生じやすい一部の記述は、表現を改めました。
- ② 適用板厚に関して、一部の最低板厚をより安全性を高めるため、変更しました。
- ③ 工学的な見解に基づいた箇所がありましたが、現時点において試験や評価によって性能確認をしていないため、その記述は、削除をしました。

例えば、改訂番号 6（黄色網掛け部）に示すとおり、P20 解説 2)に記載されている折り曲げ加工の記述に関して、b)の杭頭部直上の折り曲げ（勾配 $\leq 1/6$ 、追加帯筋 2-D16）は削除をしました。

記

番号	改訂箇所	改訂内容	備考
1	P4 本文 3)	適用板厚に関する本文の記述を以下のとおり変更致しました。 「3) 杭の鋼材板厚は下表とする。ただし、この鋼材板厚は「4.1 溶接継目の設計」を満足する必要最低限の板厚であるため、より厚い板厚にして余裕を持たせることが望ましい。」	必要最低板厚を記載しておりますが、薄い板厚を推奨しているような文章になっておりましたので、改訂致しました。
	P4 解説 3)	適用板厚に関する解説は本文に移動しました。	
2	P4 本文 3) 表	WSD390 WD35N を鋼種 2 (490N 級) 以上に溶接する場合の最低板厚を 6 mm から 7 mm に変更致しました。併せて、各種検討を再度実施致しました。	計算上 6 mm で間に合いますが、安全率をより多く確保しました。
	P14~16 表		
3	P8 2.2.2 備考*2	杭頭部構成図の施工誤差吸収用余長について、よりわかりやすいように記述及び図を修正致しました。	
	P17 図 4.2		
4	P9 解説	付着試験の結果について、一部表現を以下のとおり修正致しました。 「評価を得た」 → 「確認した」	

5	P18 本文 4.2.2 1)	開先付き異形棒鋼の配列設計に関する記述の一部を以下のとおり修正致しました。 「実際の杭頭部は柱主筋、基礎梁主筋及び S 造の場合はアンカーフレーム等が存在しているためそれらと干渉しないためには十分な間隔を確保する必要がある。 配筋用参考値 WD32N:120mm 以上、WD35N:125mm 以上、WD38N:130mm 以上」	初めて使用する場合、開先付き異形棒鋼の間隔が、実際にどの程度必要か判断しづらいことを考慮し、従来の配筋を考慮した間隔に修正致しました。 溶接施工が可能な最小間隔は解説に移動しました。
	P18 解説 1)	「溶接作業用最小値 WD25N:90mm、WD32N:100mm、WD35N:105mm、WD38N:110mm」	
6	P18 本文 4.2.2	開先付き異形棒鋼の配列設計に関する以下の記述を削除致しました。 ・不均等配置に関する記述 ・束ね筋として使用する場合の記述	材料認定の範囲内かつ現行の基規準および指針に示された内容に留めるようにしました。 杭直上の杭頭補強筋の折曲げは、現時点において試験や評定によって性能確認をしておりません。
	P20 本文 4.2.5	杭直上の杭頭補強筋の折曲げ(勾配 1/6、帯筋 2-D16)に関する記述を削除致しました。	
	P20 解説 2)	開先付き異形棒鋼の折曲げ加工について、設計者が自由に設定できる直線部長さが固定であるかのように表示されていたため、図を削除し、その旨の記述を以下のとおり追加致しました。 「この上部フックの直線部長さは「鉄筋コンクリート構造計算規準・同解説」または「建築工事標準仕様書 JASS5 鉄筋コンクリート工事(2009)」等に従い、構造計算上適切な長さを確保することとする。」	
7	P19 解説	付着の各種計算式についての解説の一部を削除致しました。	
8	P21 解説 1)	計算方法の出典を以下のとおり明記致しました。 「上記より、短期の検証用計算式は、学会「RC 規準・同解説(2010)」の 14 条の式を円形断面に変換した下記による。ただし、計算式については学会「RC 規準・同解説(1971)」の 15 条に詳細に解説されている。」	

ページは改定後のページ

以上